

鉢および台付鉢。1104は口縁部に回転ヨコナデが施され、口唇部が少し拡張される。外面には波状紋と下部に研磨が観察できる。1131は大形鉢で、口縁部は外側への折り返しで外面に段が作られる。紋様は簾状紋1段の他に押し引き紋が施されている。

甕は、タタキ調整以前のハケメ調整の有無が不確かな、a 1類：タタキ→タテまたはナナメハケメ—1105・1106・1111、a 2類：タタキ→タテハケメ→連続ヨコハケメ（直線紋）—1172、と、タタキ調整の欠落したb類：タテハケメ→連続ヨコハケメ（直線紋）—1134～1139、

がある。いずれも内面にはケズリを残す。

台付甕は1144の立い上がりは内彌する（III-2期）けれども、1145は直線的（III-3期）である。1143はWaの脚台部（III-2期）である。

1164は形態・表現は深鉢Cbと同じであるが、施紋・調整具はW系統甕に普通に見られる粗いハケメである。そして、内面にケズリを残し色調も黄褐色であり、明らかにW系統に属す。

1109は取手付き土器の取手部分。彫刻的で面はかっちりしている。

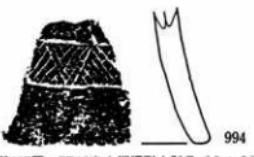
1162は脚台状土製品である。

1177・1188はI期土器の混入である。1177は頸部外面に沈線を多条に施す。口縁部内部は三角形刺突紋、口唇部には二枚貝刺突紋を施す。頸部にも刺突紋が加えられている。1178は有段波状口縁甕。口縁部内面には強いヨコナデで段が形成されている。ハケメ工具の波状紋が施されている。

SD18 (図版55～ 図版60)	III-1期を中心とする。1179～ 1186・1188～1191・1192～1196・ 1202・1204～1219・1227～1240・ 1245・1246～1253・1255・1261～1267 はA系統、1191・1254はB系統、 1187・1203・1244はD系統、他はW 系統である。
-------------------------	--

A系統 太頸壺。1206は口縁部に回転ヨコナデが施され、口唇部は凹面をなす。口縁部内面に管状工具圧痕、口唇部上下端に二枚貝刺み、頸部には二枚貝刺み2条突帯、以下は櫛描直線紋→二枚貝刺突紋→磨消線の反復となる。

細頸壺は口縁部の立ち上がりが明瞭でAaとして確定できるものと、立ち上がりが不明瞭でAbに近いものとがある。Aaは、櫛描紋（櫛描紋e'期）系と非櫛描紋系、そして磨消線紋系の3系列に区分できる。その識別については、頸部に沈線をめぐらすもの（1180・1208・1230・1235）は非櫛描紋系である。櫛描紋系と磨消線紋系の識別は、頸部施紋が直線紋を主とするもの（1179・1181・1188・1202・1204・1207・1209・1233）は櫛描紋系が多く、上半に波状紋を何段も密に施し下半を直線紋とするもの（1190・1205・1231）は磨消線紋系に多いという傾向がうかがえる。体部施紋は1179が波頂部の尖る波状紋が4段施



第185図 SD18出土銅鐃形土製品 (2:3)

されている。波状紋を施すこと自体珍しい。頸部に隆起があり、B系統との折衷型である。

1189は直線紋とコンパス鋸歯紋を反復させた後、最下段にくずれた連弧紋を配している。

紋様的にはB系統と関係ある。1190は磨消線紋系であるが、幾位の施紋は脱落している。

1207は櫛III種(6・6)の直線紋である。1210も櫛III種(3・3)の直線紋を簾状紋風に施している。1235は磨消ハケメ帯の終末形態で、磨消帯のみが残存している。1247は櫛III種(4・

#### 4) 直線紋

底部は1218～1219・1258が木の葉痕を残す。

円窓付壺。1228は口縁部に指頭圧痕を施し、頸部以下も沈線と磨消線を反復させ古い特徴を示している。

壺は平底と台付がある。口縁部は指頭圧痕の施される Af 系の台付壺と Ad 系の台付壺がある。脚台部は、1182・1183・1193・1212・のように天井部にヘソ状の突起のあるものや、1194・1212～1216のように脚端部の接地面が内側に拡張するものがある。1246は大形壺で口径47cm、器高57cm。口縁部はヨコナデされ口唇部は凹面をなす。スヌの付着ではなく、貯蔵用であろう。

壺には、深鉢 Cb を模倣した例がいくつかある。1196・1264～1267で、体部外面は櫛条痕を施すもの施さないものとあるが、いずれも口縁部内面にハケメを残し、その上から櫛(ハケメ工具による)刺突紋を施している。本来の深鉢 Cb は1263のように内面はナデ仕上げで全くといってよいほどハケメを残すことはないので、同じ系統に含めることはできないのである。有孔土器は1237・1238、有孔鉢は1227・1245がある。

**B系統** 1191は頸部に櫛で縱位櫛描紋を施し、体部上半は半載管状工具で直線紋と波状紋を施している。1254は体部上位の隆起部分である。櫛 I 種 A 類で施紋している。黒色仕上げ。混入であろう。

**D系統** 1187は若干垂下した口唇部にハケメ工具刻みと、体部上半にハケメ工具の直線紋を施す。1203は細頸壺 Aa の系列である。口縁部屈曲部に二枚貝刻みが施されている。体部は無紋で下半部に研磨が施されるものである。1244は口唇部上下端にハケメ工具の刻みを施し、体部上半にハケメ工具の直線紋を施す。

**W系統** 1198は口縁部内面に円周 4 分割の位置に 2 ケ一対の瘤状突起が貼り付けられ、押し引き状の扇形紋も施されている。口唇部は波状紋、体部は櫛III種(3・3・3)の直線紋が施されている。

1220は太頸壺 Wb。口縁部は 2 条沈線後回転ヨコナデ。1221は細頸壺 Wa。口縁部には回転ヨコナデ。1222は櫛III種(1・2・2)櫛描紋。体部下半には横位の研磨。伊勢湾西岸部的な特徴である。1243は太頸壺 Wb の口縁部だが、ナデ仕上げの無紋である。1256は縦型流水紋。櫛II種 b 類(おそらく細い管状工具であろう)を原体とする。1257は櫛III種。1260は太頸壺 Wb 口縁部。櫛の羽状圧痕が施されている。壺は1199は Wa、1200はタタキ痕を残さない。どちらも内面のケメリは確認できない。1259は上げ底気味の底面にハケメを残している。

1241は円窓付壺。口縁部は回転ヨコナデされ、口唇部は凹面をなす。体部の形態はW系統の典型であるが、最大径部下位の横位研磨はA系統やD系統に関係する特徴であり、完全にW系統として独立したものではないことを示している。

1252・1253は折衷型である。B系統との関係がうかがえる。

**銅鏡形土製品**  
994は、鋸身裾部分の破片である。横位に複合鋸齒紋が観察できる。各鋸齒紋内は斜格子紋で埋められているが、鋸齒紋以前に斜線で充填されているようにみえる。

1201は周縁が打ち欠かされただけで研磨されていない土製円板の未成品。1239は脚状土製品、1240は厚めの盤状土製品である。

**S D 19  
(図版61・62)** 1272～1279・1299・1302・1303はA系統、1280・1281はB系統、1301はC系統、以外はW系統。

**A 系統** 細頸壺 Aa は、非櫛描紋系 (1268・1269) と櫛描紋系 (1270は頸部に沈線3条と櫛II種直線紋、1271は櫛描紋 e' 種) に分かれる。

1272は円窓付壺。頸部に沈線4条。

台付壺1279は脚部の天井部分にヘソ状の突起がある。1275・1299は口縁部に指頭圧痕紋が施されている。

1302・1303は深鉢 Cb の模倣である。1302は口縁部内面に、1303は体部外面の条痕の下にハケメが観察できる。

**B 系統** 1280は口縁部を回転ヨコナデで仕上げている。口唇部には単独圧痕が施され、頸部以下は櫛II種A類を原体とする施紋がある。器面はナデで仕上げられている。1280は器面がナデで仕上げられ、口唇部は板でD字刺みが施されている。

**C 系統** 1301は深鉢 Cb。

**W 系統** 1282は太頸壺 Wb。口縁部は3条沈線後回転ヨコナデされ、縦位に櫛で切られている。頸部以下は直線紋→櫛刺突紋→ハケメ工具で刻まれた幅広の突帯→ハケメ工具の羽状圧痕紋→直線紋の順で施されている。1183は口縁部が上下に拡張され、口唇部は沈線3条→回転ヨコナデ→鋸い刻み状の圧痕という順で施紋されている。頸部は上下が回転ヨコナデされ、中央にタテハケメが刻み状に残っている。

1284・1285は細頸壺 Wa. 1284は口縁部に3条沈線後回転ヨコナデされ、櫛刺突紋、櫛III種(3・3・2)直線紋が施されている。1285は櫛III種(3・2の反復)直線紋が施されている。

1294は太頸壺 Wb。口縁部無紋で頸部には縦位の粗いハケメ。1295～1298は櫛III種櫛描紋。1295・1296は2・2・2、1297・1298は3・3・3である。

1293は壺体部上位でタタキ痕を残す。

**堀** 1290はタタキ痕を確認できるが、1291は不明。1300はハケメ工具の刺突紋が施されている。1292は台付堀の脚台部だが、立ち上がりの外反は新しい様相である。出土層位は上層であり混入である。

高杯はWaの1287のほか、同形態の杯部をもつ1288がある。口縁部は口唇部直下に突帯状の段がつくられ、ハケメ工具で斜格子紋と斜位の連続圧痕が施されている。1289は脚部上位で、鋭い切り込み状の沈線が施されている。

## S D20

(図版63)

III期

出土土器は大きくIII期とIV期に分かれ、III期はさらに細分できる。

1305・1317はA系統壺。1305体部の磨消線は、上位4段が深く沈線状をなしている。1317は縦位直線紋間に磨消線が埋めている。III-1期。

1304・1312はW系統壺である。1304の外面は風化しており紋様の把握は困難である。櫛III種のようである。1312の斜格子紋も櫛III種のようである。最大径部の櫛押し引き紋はA系統細頸壺の刻み突帯からの紋様転換であろうか。III-2期以降。

1314～1316はB系統壺。1314は沈線紋を主とし、上位から沈線で横帯に区切った後複合鋸齒紋風に右下がり斜線紋に左下がり斜線紋を部分的に加えた施紋とV字状懸垂紋の組み合わせを反復させる。1315はおそらく横位に直線紋を施した後、沈線の斜格子紋、波状紋と施していく。1316は通常の櫛I種A類による施紋。いずれも黒色仕上げ。III-2期以降。

IV期

高杯と甕が出土している。1310は口唇部に刻みがない。1311は口唇部に規格的なハケメ工具刻みが施され、体部内面はケズリが頸部まで達していない。

## S D22

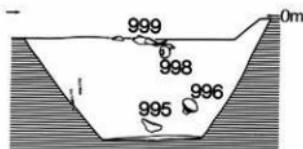
(図版64)

1324がW系統である以外はA系統に属す。

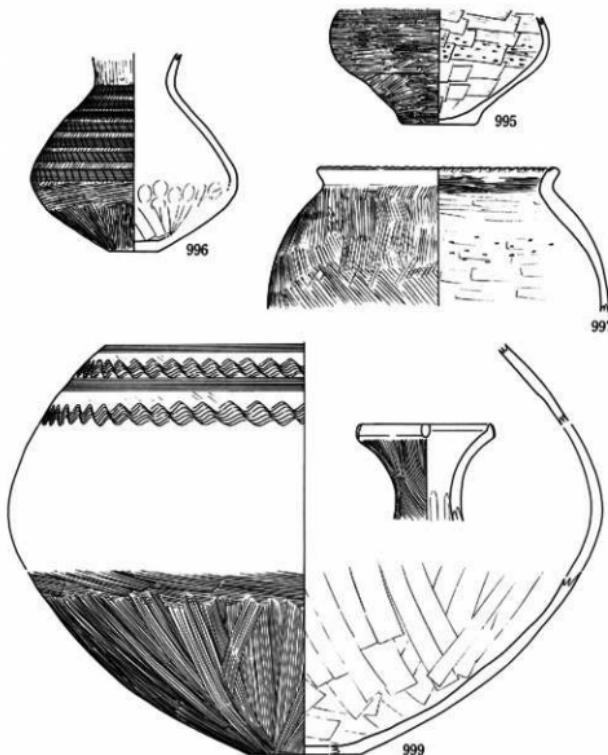
1318・1319は櫛捲紋系、1321・1322・1325は磨消線紋系である。1319は櫛III種(4・3)で縦位直線紋の後横位に直線紋を施している。1318は櫛III種かどうかは風化しているため判然としない。1312は半截管状工具の縦位刺突紋の後に磨消線が施されている。1322は小形の台付壺で、体部上半に縦位櫛刺突紋と磨消線が施され、その下には実測図に見るように複合鋸齒紋と刻み突帯が施されている。1325は粘土紐垂下後に磨消線というよりは沈線を施している。粘土紐垂下は古い手法である。

## S K23

996はW系統の簾状紋壺。口縁部は口唇部を上下に拡張する太頭壺であろう。995は細頸壺Aaの体部。体部上半は磨消線紋のようだ。997は口縁部内面に指頭圧痕紋を施す甕。以上は下層。998は細頸壺Aa。非櫛捲紋系であろう。999はW系統壺。直線紋と波状紋の組み合わせを反復させる。以上は上層。



第186図 SK23土器出土状態 (1:40)



第187図 SK23出土土器

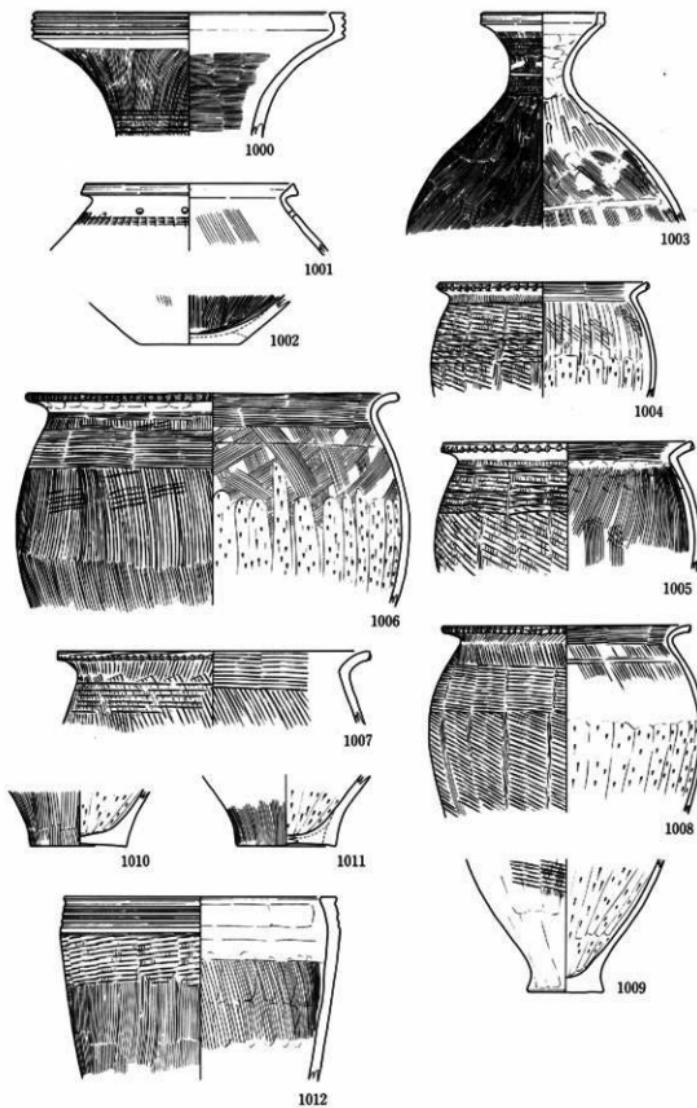
**S K 159** 1013~1019はA系統、1018・1020はD系統、1021はB系統。

**A系統** 1019は口縁部に部分圧痕紋を施す。圧痕はD字の流れた形状になっている。

台付甕脚台は、1014・1015が小さな台を別に作って組み合わせているのに対し、1017は充實で作られている。1017の脚端部はヨコナデされ、接地面が凹面をなしている。

**D系統** 1020はA系統甕に比べて体部上位の張りが強いだけで、大差はない。胎土色調の特徴がW系統に近い。1018は底部成形がdでD系統の特徴を示している。

**B系統** 1021は口縁部に板で刻みを加える。以下は櫛描紋であるが、上位6段は直線とも波状とも言えない微妙な上下の搖れがある。その下は、櫛描紋帯2帯で大きな連弧紋を配した後、谷の部分を3帯の小さな連弧紋で埋めている。手法的にはⅠ期の二枚貝刺突連弧紋と同じ

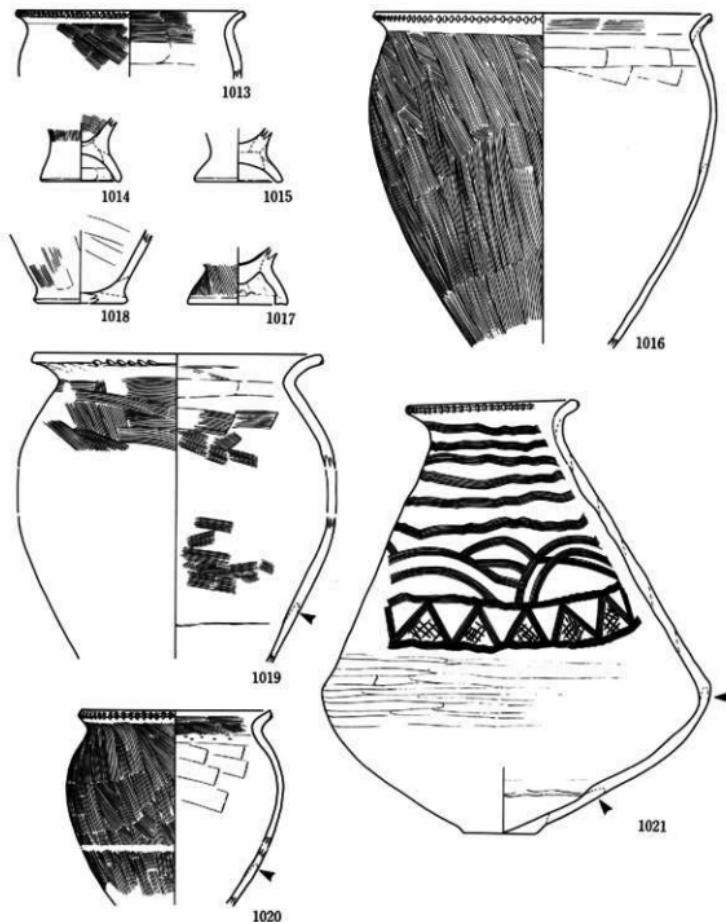


第188圖 SK159出土土器 (1)

である。最下段は横位に波状紋を施した後鋸歯紋を作りその下に波状紋を加えて閉じる。

そして、一つおきに沈線斜格子紋で埋める。黒色仕上げ。

D系統 1000は太頸壺 Wb。口縁部は沈線3条後に回転ヨコナデ。沈線はかなり深い。1001は短頸壺。口唇部は回転ヨコナデで凹面をなす。円孔と簾状紋の一部が観察できる。



第189図 SK159出土土器 (2)

1003は細頸壺 Wb。口縁部は回転ヨコナデで凹面をなす。頸部には櫛描直線紋と沈線5条が施される。体部外面は無紋でハケメを残す。ハケメの下にタタキ痕が観察できる。内面は上位に工具による引っ搔いた痕跡が顕著に残っている。

甕は各種調整の組み合わせと順序によって、

a 2類：タタキ→タテハケメ→連続ヨコハケメ—1006、

a 3類：タテハケメ→タタキ—1008、

a 4類：タテハケメ→タタキ→連続ヨコハケメ—1004・1005

b 類：タテハケメ→連続ヨコハケメ—1007、

の4類に区分できる。

1009は、甕下半で外面にはハケメとは異なる擦痕がある。

1012は他に類例の少ない円筒形の鉢形土器である。口縁部は4条沈線後に回転ヨコナデされ、体部はタテハケメの後上位のみタタキが施されている。

1010・1011はやや上げ底をなす。

S K 255 1024～1027はA系統、1032～1035はB系統、1028・1029はW系統。1022・1023・1030・1031は折衷型である。

A系統 1024は非櫛描紋系、1025・1026は櫛描紋（櫛描紋“e”系）系、1027は磨消帶だが頸部には櫛描紋が施される。1026の口縁部形態はW系統の影響であろう。

B系統 1032は斜格子紋帯の上下に沈線を2条づつ付加し、その下に沈線2条と二枚貝刺突紋を施す。体部主紋様の懸垂紋は、縦位の櫛描紋を何条もの沈線で横に区切ったあと両側を沈線で挟む。そして下端両側から櫛描直線を「八」字状に加える。懸垂紋は何箇所かに配され、その間には縦位波状紋（郷I様）を沈線で囲い、さらに下部に縦位沈線と横位沈線波状紋を加えた単位紋を幾つか配置するものと推測する。

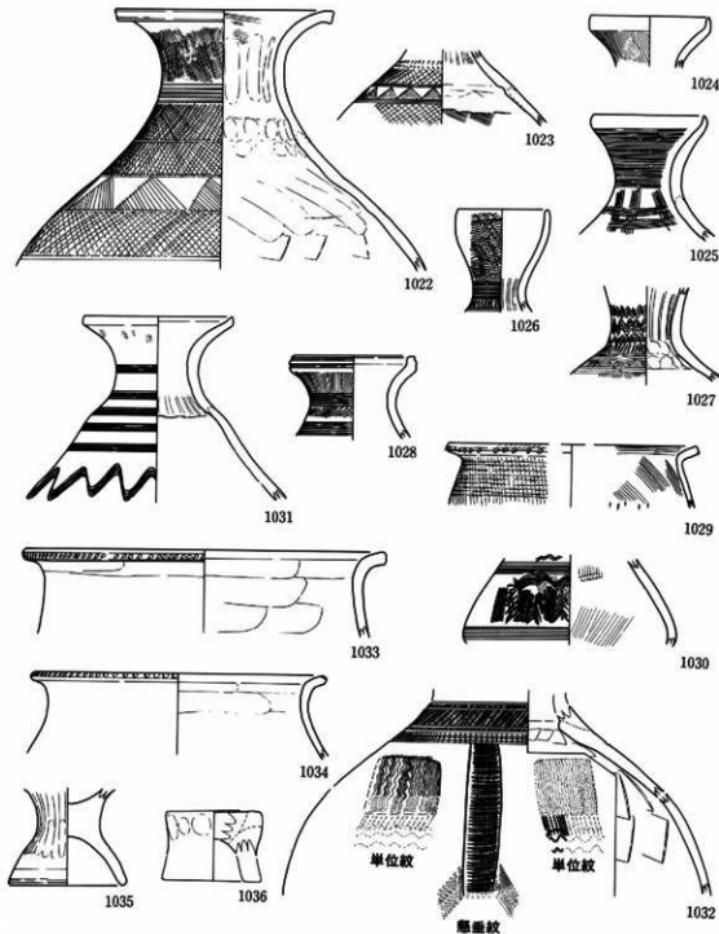
1033～1035は台付甕で口唇部はD字刻み、頸部以下外面はナデ調整される。

W系統 1028は太頸壺 Wc。口縁部は2条沈線後回転ヨコナデ。頸部は直線紋と櫛刺突紋が施されている。1029は甕 Wb。

折衷型 1022は口縁部は回転ヨコナデされ頸部にも沈線が3条施されておりA系統の特徴を示すが、体部施紋は鋭い切り込み状の沈線によって施されておりB系統の特徴を示す。1023は半截管状工具の刺突紋以下櫛描直線紋と鋭い沈線紋との組み合わせであり、A系統とB系統の中間的様相である。

1030は横位紋様が直線紋と波状紋の反復のようであるが、実測図のように縦位直線で分割した中に沈線で左から斜格子紋、羽状紋、菱形紋が施されている。

1031は体部上位の隆起がB系統、口縁部はA系統、施紋はW系統となる。

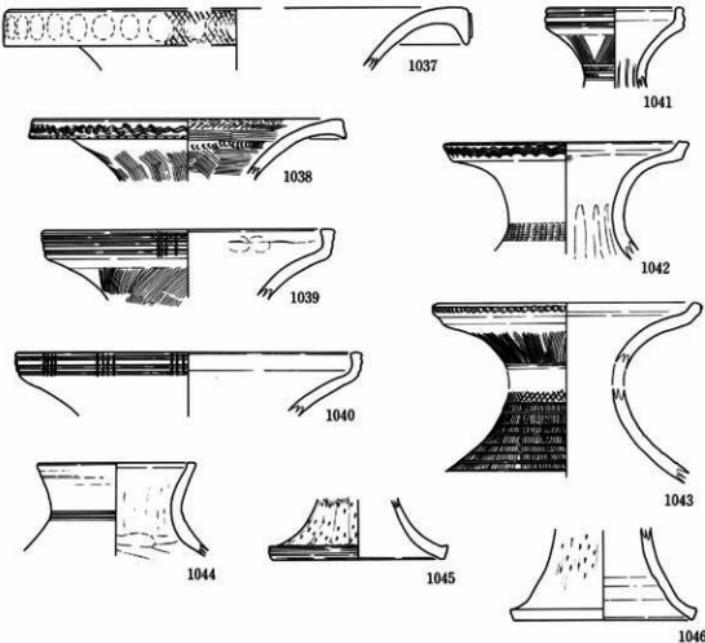


第190図 SK255出土土器

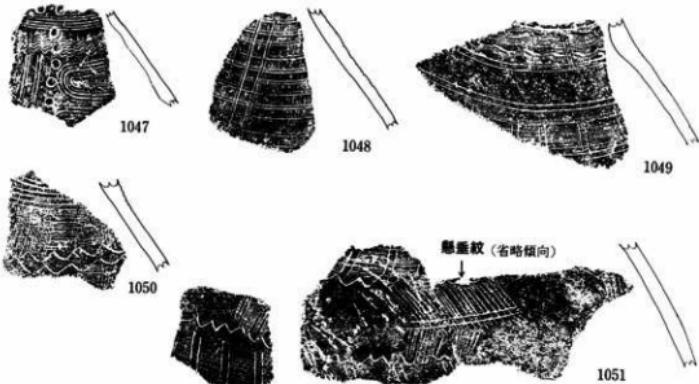
S K262 1037~1042・1044~1048はW系統、1043・1049~1051はB系統。

**B系統** 1043は口縁部に回転ヨコナデが施され、外面は凹面をなす。口唇部上端は板で刻まれる。頸部には斜格子紋、以下は半截管状工具で平行線が施されているが、櫛III種ではない。1049は櫛I種A類と半截管状工具による施紋。1051は横位の櫛描紋帯を縦位に半截管状工具で切る手法は1049と同じだが、その間に懸垂紋を沈線で加えている。いずれも黒色仕上げ。

- W系統** 1037は太頸壺 Wa。口唇部は下方に拡張され、ハケメ工具で斜格子に圧痕が施された上に円形浮紋が貼り付けられる。1038は口縁部内面に櫛羽状刺突紋。頸部寄りに爪状圧痕を残す。
- 1039は太頸壺 Wb で、口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデされ、さらに櫛で切られる。1040も同じ手法。1041は細頸壺 Wb。口縁部は2条沈線に回転ヨコナデ。頸部は沈線3条。
- 1042は形態が1043に近似する。口縁部は外傾し、回転ヨコナデで同じ様に凹面をなす。
- 1044は短く立ち上がる口縁部と頸部に沈線3条。円窓付壺か。
- 1045・1046は高杯脚部。1045は脚端部に回転ヨコナデで凹線が2、3条できている。外面にケズリ痕を残す。
- 1047は縦型流水紋。1048は櫛III種（2・2・2）の櫛描紋。



第191図 SK262出土土器 (I)



第192図 SK262出土土器 (2)

S B04  
上層

1052は口縁部内面の櫛描連弧紋を除けばA系統である。連弧紋はW系統の施紋である。口縁部は回転ヨコナデされ、口唇部は凹面をなす。上下端部には刻みが別に施されている。頸部には突帯が2条めぐらされ、刻みが加えられている。

1053はタテハケメ→タタキ、1054はタタキ→タテハケメ、1055はタテハケメ→連続ヨコハケメ。1056是有孔鉢。口縁部には指頭圧痕紋が施されている。

1058はB系統台付壺。

S B25  
上層

1059は全面研磨の高杯。口縁部は外方へ突帯状に段をなす。

1060は台付壺 Wa の脚台部。1061は底部が厚いので台付鉢の脚部であろうか。1062はA系統台付壺の脚台部。

包含層一括 1063はB系統壺である。口縁部はヨコナデされ、やや外反する。頸部以下は櫛描紋(櫛I種A類)と沈線紋の組み合わせである。頸体部界には二枚貝刺突紋が施されている。

1064は形態的には細頸壺 Aa。全面磨消線紋手法で三角形を組み合わせた一見複雑な紋様を施している。

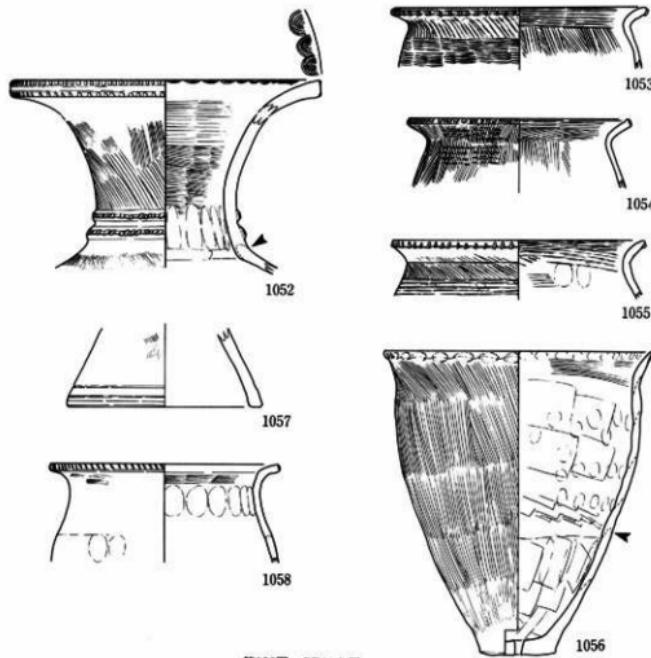
紋様は次の順序で施されている。縦位に櫛描波状紋→体部の下半分に13条の磨消線→器面8分割の軸線として縦位の磨消線→縦位分割単位内部を対応する直角三角形3段でもって埋め、直角三角形は斜位の磨消線で充填する→体部上半には横位磨消線がないので、欠落部分を補う。縦位分割の軸線を挟んで施されている直角三角形は左右ですべて二等辺三角形にはなっていない。軸線から視点をずらした場合に整っているように見えるのは、頂点が下を向く中央の三角形だけである。

本例は、当初から磨消線紋の幾何学的構成を意図していたとは考えられない。紋様構成上不必要的縦位波状紋と最初の横位磨消線が図形の基礎単位になっておらず、紋様は縦位

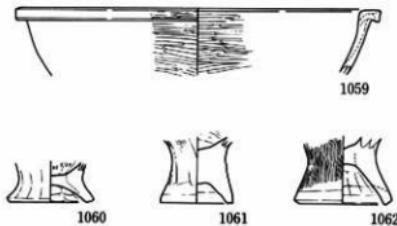
の軸線設定後に構成されているからである。途中で変更を加えた例として注目したい。

1065は三角形の枠を施して後に磨消線を充填している。最初から意図的に施紋されている。

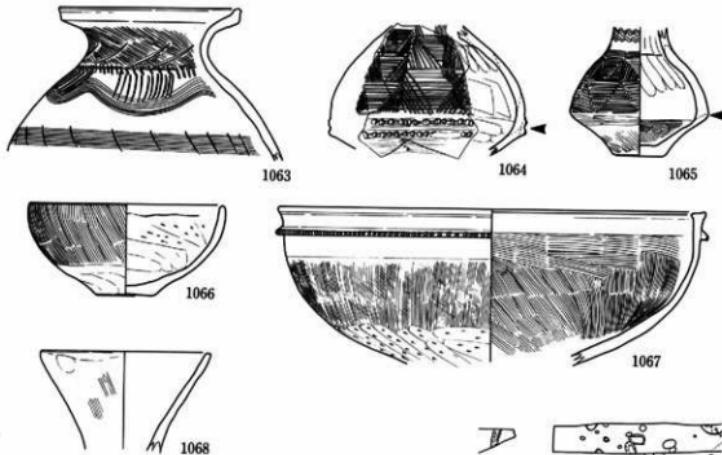
1066はA系統鉢。1067はW系統鉢。口縁部は回転ヨコナデ。口唇部は拡張して微妙に凹面をなす。



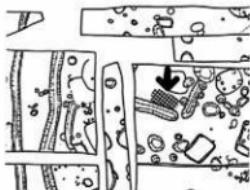
第193図 SB04上層



第194図 SB25上層出土土器



第195図 包含層一括出土土器



第196図 土器群出土位置

#### その他の遺構

- S K29 1327はA系統平底甕。1328は深鉢 Cb。1329は甕 Wb。この3点と共に1330は高杯 Wa。
- S K62 口縁部は上下に離れて沈線を施して後に回転ヨコナデ。杯部外面はケズリ痕を残している。1331・1332はタテハケメ→タタキ、1333・1334はタタキ→タテハケメ。1335はタタキの向きが上下で転移している。成形第1段階と成形第2段階の調整作業上の姿勢の違いに由来するのか。
- S K85 1336は太頸甕 Wa。口縁部内面はハケメ工具圧痕。口唇部は3条沈線後に回転ヨコナデ。1338は太頸甕 Wb。1337はA系統細頸甕。口縁部は回転ヨコナデ。1339はB系統か折衷型。口唇部に刻み。1340は小形の高杯か。口縁部は回転ヨコナデ。1341・1342は鉢か高杯 Wa。1343は脚端部が沈線を施したように凹線をなす。1344は高杯 Wb。1345は外面にケズリ痕を残す高杯脚部。脚端部は上方はねあがる。1346は台付器種の脚部。1348はタテハケメ→タタキ、1350はタタキ→タテハケメ。1357は外面に擦痕を残す。1347・1349はタテハケメ以下の調整がタタキかどうかはっきりしない。1352はナナメハケメ?→タテハケメ→ハケメ工具による波状紋。口唇部はハケメ。1355・1356は底部成形d。1353は台付甕 Waの脚台部。

- S K 78 1358はタテハケメ→連続ヨコハケメ。1359はタタキ→ナナメハケメ。口唇部は上下からのハケメ。底部は焼成後穿孔。有孔土器。1360はタタキ→タテハケメ。1362はタタキ→タテハケメ→連続ヨコハケメ。1361は立ち上がり内壁気味の脚台。台付甕W (A)。
- S K 83 1363は太頸壺 Wb。
- S K 95 1364は円窓付壺かもしれない。1365は隆起部に斜格子紋を施している。器面は非常に粗いハケメ。
- S X 13 1366はB系統壺。横位斜格子紋帯を基調とする紋様構成。黒色仕上げ。1367はW系統壺。上下に重ねれば壺縫。
- S K 110 1368は細頸壺 Aa の櫛描紋系だが、口縁部はほとんどAb。口縁部は回転ヨコナデ。1369はD系統を模倣したA系統壺であろうか。体部のハケメは粗い。3本/cm。
- S K 325 1370は円窓付壺。口縁部は回転ヨコナデ。
- S K 117 1371はタテハケメ→タタキ。口唇部はハケメ。底部に焼成後穿孔。有孔土器。
- S K 126 1372はB系統壺。櫛I種A類。黒色仕上げ。
- S K 137 1373はタテハケメ→タタキ。1374は折衷型。口縁部内面は円周4分割の位置に3ヶ1単位の瘤状突起。口唇部は回転ヨコナデで凹面をなす。頸部以下は、波状紋→直線紋→沈線斜格子紋→直線紋→コンバス鋸歯紋→管状工具圧痕の順で施される。
- S K 137 1375・1376は鉢。口縁部は沈線後回転ヨコナデ。1377はB系統鉢。外面ナデ仕上げ。
- S K 153 1378は鉢かもしれない。タタキ→タテハケメ→波状紋。内面には若干ケズリが観察できる。
- S K 157 1379は珍しい形態。1380は口縁部に1条沈線後に回転ヨコナデの後、ハケメ工具羽状圧痕を施す。1381は口縁部の内傾が強く、高杯 Wa とは異なる。台付無頸壺かもしれない。1382・1383は高杯脚部。脚端部は回転ヨコナデされ、端面が凹面をなす。1384はタテハケメ→連続ヨコハケメ。1385は台付甕W (A) 脚台。
- S K 145 1386は貫通しない多数の小孔が施されている脚部。
- S K 142 1387は体部下半に擦痕が観察できる。口唇部はハケメ。1388は細頸壺口縁部。系統不明。
- S K 198 1389は太頸壺 Wa。口縁部内面には瘤状突起が貼り付けられている。口唇部は下方に拡張され、管状工具圧痕が施される。頸部には幅広のハケメ工具による刻み突起が施されている。1390は櫛描直線紋で区切られた中が、コンバス鋸歯紋、ハケメ工具圧痕(疑似織紋風)で充填されている。1391・1392・細頸壺 Aa 系統。1393・1394はI期土器の混入。1393は口縁部外間に縦位の沈線紋が施されている。C系統に属すか。
- S K 203 1397は太頸壺 W。1398は口縁部が回転ヨコナデされ、口唇部が凹面をなす。口縁部内面は波状紋、頸部はコンバス鋸歯紋、以下直線紋が施されている。

- S K 216 1399は太頸壺 Wc。口縁部は2条沈線後に回転ヨコナデ、頸部は簾状紋、体部は波状紋。体部下半にはA系統壺のような成形第1段階接合部の変換点がある。1400はタテハケメ→連続ヨコハケメ。口唇部はハケメと刻み。1401は受口状口縁甕。口唇部と屈曲部に刻みが施されている。1402・1403は台付甕 Wa の脚台部。1404はW (A) の脚台部。1406は台付甕Waの脚台か。1407~1411は台付甕Aの脚台。1409は接地面の拡張が最も目立つ。1405はB系統台付甕。
- S K 238 1412・1413はB系統壺。懸垂紋のないグループ。1414は口唇部が上方に伸びて少し受口状をなす甕W。外面にハケメ。体部はタタキ→タテハケメ。
- S K 243 1415は口唇部に刻みを施す受口状口縁甕。1416はその脚台か。
- S K 246 b 1417は体部に管状工具圧痕、コンバス鋸歯紋、櫛描直線紋を施す台付壺 A。1418はW系統の鉢か台付壺の脚台部。3条沈線後に回転ヨコナデ。1419は細頸壺 Wb。口縁部は2条沈線後に回転ヨコナデ。体部上半には沈線波状紋。1442は太頸壺 Wb。口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデ。その上に刻みが加えられる。1443は高杯。突帯状に段を作り出した口縁部外面に斜格子紋が施される。突帯下には沈線が加えられている。1444はタタキ→タテハケメ。1445はタテハケメ→連続ヨコハケメ。1446・1447はB系統壺。1448は甕 Af。
- S K 263 1420はタタキ→タテハケメ→連続ヨコハケメ。1421はタタキ→タテハケメ→ハケメ工具波状紋。
- S K 279 1422は1414と同類。口縁部はハケメ。体部はナナメハケ（タタキ?）→タテハケメ。
- S K 299 1423~1425はA系統土器。1426はB系統土器。1429是有孔鉢。口縁部外面に指頭圧痕。体部外面はハケメと部分にケズリ痕。内面は砂が細かいのでケズリ痕がはっきり残らない。1428は台付甕A脚台。底面にハケメ。天井部にはヘソ状の突起がある。1429は台付鉢の脚部か。1430はタテハケメ→断続ヨコハケメ。1432は底部の上げ底の度合いが大きい。
- S K 109 1434・1435は甕 Af。1436は櫛III種 (2・2・2) 直線紋。1437は折衷型。隆起部に斜格子紋が施され、下に直線紋が伸びている。
- S K 211 1438は太頸壺 Wa。口縁部内面は櫛刺突羽状紋と瘤状突起、口唇部は管状工具刺突による重円紋。1439はハケメ工具圧痕紋。原体の動きは簾状紋風であろう。1440はB系統壺。口縁部はヨコナデのあと沈線波状紋が施されている。
- S K 236 1441は波状紋で区切られた中に櫛描連弧紋が2段確認できる。上段は三重連弧紋とその谷に充填される3条の直線紋 (1021では連弧紋であった) の反復であろう。下段は大きな二重連弧紋の反復であろう。黒色仕上げ。
- 包含層 1449は細頸壺 Aa 系統。頸部の扇形紋はW系統からの借用か。
- 1451は口縁部に回転ヨコナデ。口縁部内面は3ヶ1単位の瘤状突起が円周4分割の位置に施される。頸部には簾状紋が観察できる。

1453は口縁部の傾斜が強い。円孔が2つあるので台付無頸壺であろうか。口縁部外面は回転コナデが施され、不揃いな凹線が7条観察できる。下半はケズリ。

1454は1067のようなW系統突帯紋鉢。

1455は高杯または台付無頸壺の脚部。脚部裾は回転コナデが施され、凹線が2条確認できる。その上方にはタタキ痕が観察できる残している。

1457は口縁部に櫛描紋の施された細頸壺 Wa を大きくしたタイプの壺。頸部にも櫛描紋が施されている。

1458は口縁部内外面、体部上位にコンバス鋸歯紋の施された受口状口縁壺。

1459は口唇部に櫛刺突紋を施したB系統タイプの壺。

1460は壺D。受口状口縁部外面にはハケメ

工具で羽状圧痕紋とハケメ工具圧痕を加えた

棒状浮紋を貼り付ける。頸部はB系統やC系

統壺の古い形態に類似する長頸形を呈する。

紋様は直線紋→波状紋→2条平行直線紋(半

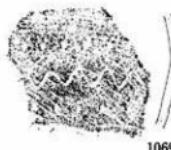
截管状工具)→鋭い切り込み状の斜格子紋→2

条平行直線紋→2条平行波状紋→縦位に粘土

紐を垂下してハケメ工具圧痕を加える、とい

う順で施紋される。

1069は壺の体部上半。ハケメ工具の圧痕紋と波状紋が組み合っている。



1069

第197図 包含層出土土器

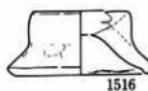
## 土製品

1515・1516は脚状土製品である。

成形法は底部成形Cに共通し、上下反転したものである。



1515



1516

第198図 脚状土製品

## 石器

### 石鎚

五角形系は84・85・86をあげることができるけれども、側縁が内彎して上部2角の明顯に突出する例は出土していない。

87は先端部よりの側縁が内彎気味で鋭くつくられて五角形的ではあるが、変形している。確定時期的な変化として言えるだけの保障はないけれども、五角形系の減少は考慮する余地があるかもしれない。

無茎は4点あるが、90は素材の歪みが大きく、側縁も弯曲している。93は先端部にさらに剥離を加えて両側縁に角を作り出している。かえって鈍角になってしまっており、先端の欠損を再生したとしてもよくわからない。

石鎚転用有軸錐(96・97)と有軸錐(98)および、大形の穿孔具(112)がある。112は、基部が断面方形で、先端は断面円形になっている。穿孔作業に伴う線条痕ははっきりしない。

### 磨製石鎚

99は残存長4.5cm。金属器を模したものか。

100は長さ1.5cmと非常に小さい。

### 磨製石斧

伐採斧は109・110がある。110は叩き石に転用されたため刃部が磨滅している。

加工斧。101・102は偏平片刃石斧である。101は側縁が平行し薄手であるのに対し、102は厚手で幅も頭部に向かって狭くなっている。

103は柱状片刃石斧である。104は偏平柱状片刃石斧である。

105は中形の偏平片刃石斧。106～108はさらに小振りの偏平片刃石斧である。

### 尖頭器

2片に分かれている。側縁の刃部は丁寧に研ぎ出している。

### その他 (図版76・77)

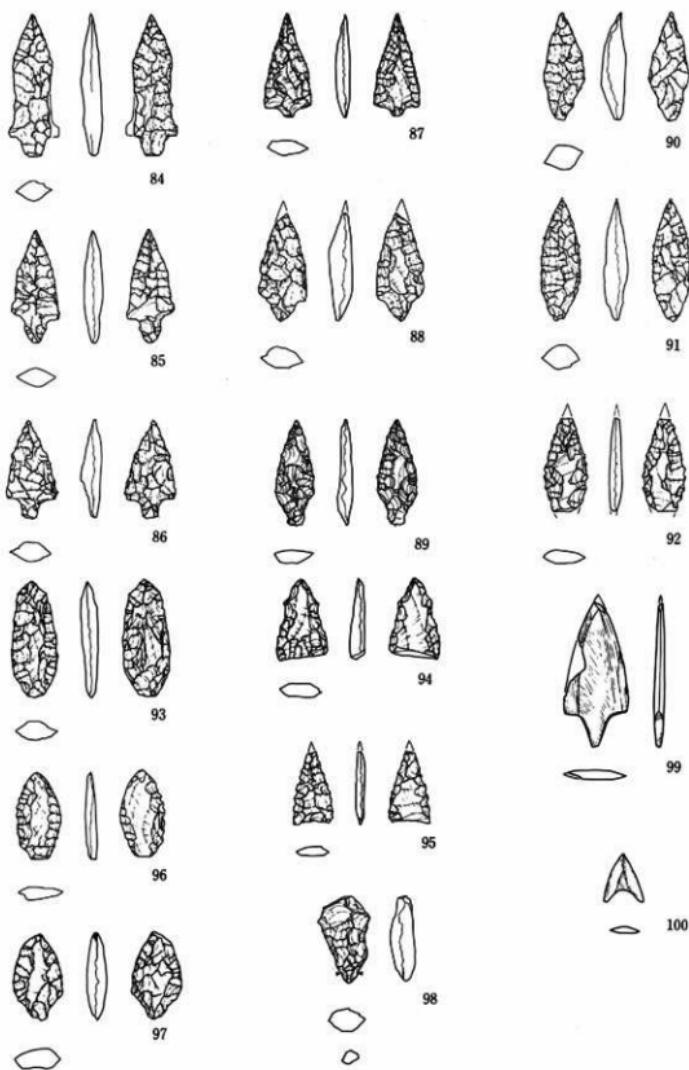
113・114は下部側縁に刃部が形成された剥片石器である。113は片面に礫表皮を残している。上部側縁は、剥片の中心に対して「V」字状に大きな剥離を加えて2つの大きな抉りを作出することによって、肩部を形成している。単に握り用というだけでなく形態表出的な要素もあるのであろう。刃部は使用により潰れている。叩く行為が行われたのであろうか。114は剥片に刃部をつけただけで極めて粗製である。

115～120は叩き石。115は剥離痕とその潰れ痕が全面を覆っている。116は磨製石斧(伐採斧)の転用で、中央部がやや凹む。117～120は棒状礫の叩き石で、両端や側縁に使用痕を残している。

121～126は砥石。121は長さが32cmあり石皿状である。

122は紐か何かの繊維痕が火熱を受けて焼き付いた礫。両端が叩き石として使用されたような風である。

127・128は砥石であるが、叩きの集中して潰れて抉れた部分が幾つか観察できる。128はどちらかと言えば台石の方であろう。



第199図 石器 (I) (2 : 3)